

授業研究「学びあいの場」を通じた教師の変容（１）

教師の「子供の見方」の豊かさに関するアンケート調査

○佐々木 良治

若松 亮太

（広島県立三原特別支援学校）

（広島県立呉南特別支援学校）

KEY WORDS: 継続した授業研究

参観時間の確保 量的分析

【目的】

A 県立 B 特別支援学校では令和 2 年度から、富山大学人間発達科学部附属特別支援学校が開発した、富附特支型研修「学びあいの場」を取り入れ、研究をスタートさせた。「学びあいの場」の本質を崩さぬよう創意工夫しながら、県立学校で実施可能な仕組みに整えてきた。

「学びあいの場」の目的は、従来の授業改善策を教えあう授業研究ではなく、子供の姿からその時の子供の思考を推察することを通じ、教師の「子供の見方」を豊かにすることである。授業参観時の視点は、子供の姿となる「事実」とその事実に対する教師の考えや見方となる「解釈」の 2 つの視点で参観する。それぞれ事実と解釈をラベルに書き起こし、①参観者同士がラベルを用いて相互に聴きあうラベル・コミュニケーション、②授業者と参観者の代表が相互に聴きあうアクティブ・リスニング、③参観者同士でそれぞれの学びを共有する協同学習リフレクションの 3 つの過程で実施する。

「事実」と「解釈」を繰り返し聴きあうことは、一人では見えていなかった子供の姿に気付いたり、新たな見方・考え方に会ったり、子供の内面を日常的に考えることにつながったりする効果が期待できる。これらを月 1 回の頻度で参観者を約 25 分間の前後半にグループ分けして実施した。「学びあいの場」実施後、「子供の見方の豊かさ」「授業づくりに生かせるか」「子供の見方の変容」に関して、毎回アンケート調査・分析した。

本研究は、「学びあいの場」を通して、授業者と参観者それぞれの教師の「子供の見方」の豊かさの変容と授業づくりへ生かせるかどうかを把握することを目的とする。

【方法】

1 質問紙の構成

「学びあいの場」実施後に県立学校グループウェアポータルサイトのアンケート集計システムを用いて、「子供の見方の豊かさ」に関する 3 項目、「授業づくりに生かす」ことに関する 1 項目、「学びあいの場」の体験後の「子供の見方の変容」に関する 1 項目、アンケート調査を実施した。質問構成を表 1 に示し、回答方法は、各質問に 7 件法（1 全くそう思わない、2 そう思わない、3 あまりそう思わない、4 どちらとも言えない、5 少しそう思う、6 そう思う、7 とてもそう思う）と、自由記述で構成した。

Table 1 質問紙調査の構成

「子供の見方の豊かさ」に関する項目 (以下、「子供の見方の豊かさ」)	1 子供を見る力が高まったと思いますか？(以下、「見る力の高まり」)
	2 子供の言動に対する解釈の幅が広がったと思いますか？(以下、「解釈の幅の広がり」)
	3 子供の言動に対する見方の癖や捉え方の傾向に気付くことができたと思いますか？(以下、「見方の癖や捉え方の傾向への気付き」)
「授業づくりに生かす」ことに関する項目 (以下、「授業づくりに生かす」)	他者の見方や考え方に触れたことで、自分の授業づくりに生かせると思いますか？(以下、「授業づくりに生かす」)
「子供の見方の変容」に関する項目 (以下、「子供の見方の変容」)	学びあいの場を通して、自分自身の子供の見方の変容があればお書きください。(以下、「子供の見方の変容」)

2 分析方法

以下の目的の下、次の分析を行った。

(1) 「子供の見方の豊かさ」と「授業づくりに生かす」の変容を捉えるため、各回別平均得点と標準偏差を求めた。

(2) 授業者と参観者の「子供の見方の豊かさ」の平均得点の差を明らかにするため、平均値 (mean) と標準偏差 (SD)

を算出し、U test (Mann-Whitney) を行った。統計解析には、R (4.03ver, exact Rank Tests パッケージ) を用いた。

(3) 参観時間と「子供の見方の豊かさ」の関係を明らかにするため、参観時間別に「子供の見方の豊かさ」の平均得点を求めた。

【結果】

1 単純集計

対象者数 210 名のうち、有効回答数が 169 名 (授業者 21 名、参観者のべ 148 名) で、回収率は 80% であった。

2 質問項目の各回別平均得点

「子供の見方の豊かさ」の項目では、回を重ねるごとに「子供の見方の豊かさ」得点が増加していることが確認された (表 2)。回を重ねるごとに「子供の見方の豊かさ」を高まり、「学びあいの場」の継続的な実施による効果が確認された。

Table 2 各回別の質問項目の平均得点

	参観者					授業者	
	第1回 n=39	第2回 n=33	第3回 n=25	第4回 n=24	第5回 n=27	合計 n=148	n=21
子供の 見方の 豊かさ	見方の高まり (1.09)	4.38 (1.05)	4.93 (0.95)	4.92 (0.89)	5.25 (0.83)	4.91 (1.03)	4.95 (0.86)
	解釈の幅の広がり (1.00)	4.87 (0.86)	5.06 (0.81)	5.08 (0.85)	5.12 (0.96)	5.09 (0.91)	5.23 (0.99)
	癖や捉え方の傾向 への気付き (0.87)	4.23 (1.00)	4.45 (0.79)	4.72 (0.96)	4.66 (1.05)	5.11 (0.97)	4.59 (0.81)
	合計 (1.02)	4.49 (1.00)	4.81 (0.85)	4.90 (0.92)	5.01 (0.94)	5.30 (0.99)	4.86 (0.92)
	授業づくりに生かす (0.95)	5.00 (0.89)	5.12 (0.86)	4.92 (0.94)	5.25 (1.00)	5.33 (0.95)	5.52 (0.74)

3 授業者と参観者の平均得点の差

「授業づくりに生かす」の項目で、優位傾向 ($p < 0.1$) が認められた。参観者より授業者の方が、授業づくりに生かしやすい傾向にあることが確認された。

4 参観時間と「子供の見方の豊かさ」得点の関係

「子供の見方の豊かさ」の得点は、参観時間が長くなるほど、高くなることが確認された。

【考察】

「学びあいの場」の回数を重ねるごとに教師の「子供の見方の豊かさ」が高まることが確認された。同僚が見る子供の姿 (事実) と同僚が捉える解釈の繰り返しの聴きあいは、質を高めていることが推察された。また、「学びあいの場」は、授業者にとって、授業づくりに生かしやすく、参観者との聴きあいは、授業者を支えることになっていると考えられた。参観時間の長さが子供の見方の豊かさに影響していることから、参観時間を組織的に確保に取り入れる必要がある。

継続的に「学びあいの場」を実施した結果、教師の「子供の見方」が高まったことは、授業研究の狙いを普段の授業に生かすことを習慣化させることに有効であったと推察された。今後、授業づくり・授業改善がどのように図られたのか、授業者を追跡分析することが課題である。

※事例発表に際し、所属長の許可を得て掲載している。

(文献)

竹村哲 (2019) 実践！特別支援教育のアクティブ・ラーニング 子どもの内面を捉え、学びの過程に寄り添う教員研修。中央法規出版。

(SASAKI Ryoji, WAKAMATSU Ryota)